

# 文芸研ニュース

2023年12月25日

—NO. 165—

発行 文芸教育研究協議会

編集 文芸研事務局



山口大会お疲れ様でした！次は、徳島へ

巻頭 辻委員長より	1
山口大会を終えて	4
サークル便り（豊前サークル）	9
青年学校便り	12
事務局通信	14
事務局員の妄想日記	15

## 実践研で共に学びましょう

委員長 辻恵子

### ◆学びを深めるために

山口大会後の四カ月余り、ばたばたしているうちに一二月を迎え、もう間もなく実践研が始まります。

この実践研が、文芸研の最も重要な一理論と実践の基礎となり、同時に最先端でもある一学びの場であると思います。以下は辻の私見ですので、いやそうじゃないというご意見がありましたらぜひお聞かせください。

学年別分科会については、提案レポートを基に各教材の分析・解釈を改めて学び、深めましょう。先行実践とは違う解釈が提示された時には、それと真摯に向き合って私たち文芸研の積み重ねてきた解釈を「より深く」「より豊かな」ものにすべく、討議をしていけたら最高です。（実践に当たってはそれぞれ教師の個性と、学級の子どもの個性が響き合って新たなものになるでしょう。）

また領域別分科会では、領域別の提案がめざすものは何か、そのためのアプローチはどうあることが最適か、そもそもの部分をまずは見ていくことが大事

ではないかと思えます。その上で、中身の検討をしていきましよう。以前の入門講座とは違い、提案者による一度きりの実践で完結して構わないのですが、可能な範囲ではじめての参加者向けにガイドンスのような部分があるとういのではないでしうか。その点についてはそれぞれ検討ください。もちろん、入門講座に近い内容の場合もあるでしう。その時はそのねらいにそつて、検討していきましよう。

もう一つ、今回研究部が主体となつて理論学習が組まれています。「新教材を学びたい」という要望がありましたので、来年度の光村教科書から六年教材「ぼくのブック・ウーマン」を探し出してくれました。学習会のねらいは「作品分析力をのぼす」「典型化を考える」の二点。みんなでぎつくばらんに討議をし、一つでも二つでも新たな発見があるとういなと思えます。特に若手の皆さん、どんどん発言してください。

◆あまりにも深く埋めこまれた差別や偏見

(興味のある方はお読みください)

遠藤まめたさんが代表の「一般社団法人にじーず」

は、全国各地でLGBT(かもしれない人を含む)の子どもや若者が安心して話したり遊んだりできる居場所づくりをしています。そのにじーずの高校生たちと遠藤さんが、「先生にお願いしたいことリスト」を作成しました。具体的にやつてほしいこととして一二項目が挙げられています。

①まずは先生が多様な性について勉強する機会をもつてほしい。

②不要な性別欄、不要な男女分けをなくしてほしい。

③名簿や整列の並び順を男女混合にしてほしい。

④「その女子!」「男子はくだから」などと男女で一括りにして扱わないで。

⑤「さん」「くん」を自動的につけるのではなく、本人の希望を聞いてほしい。

⑥多様な性に関するポスターを貼つてほしい。

⑦多様な性について授業で扱つてほしい。

⑧図書館にLGBTの図書コーナーをつくつてほしい。

⑨多様な性について勉強したい生徒たちに教室を貸してほしい。

⑩修学旅行の時、理由を言わないでも個室入浴可にしてほしい。

⑪修学旅行の時など、配慮／対応できることリスト

がほしい。(情報がないと「行けない」と思う。あれば「行くかどうか自分で決められる」)

⑫多様な性について相談できる窓口をつくってほしい。

どうでしょう。「やってしまっている」とか「気づかなかった」とか心当たりはないでしょうか。わたしも学生の頃ジェンダー平等を求めて、学校にお願いしたいこと(という穏当な表現でなく「改善を要求すること」という尖がった形でしたが)を列挙した経験があるので、ああ同じだなあとこれらの言葉が心に刺さりました。教師として過ごすうち、最初は忸怩たる思いで、そしてやがて良心の呵責もなしに不必要な男女別様式に慣れて墮落してしまっただけなのこと。この子どもたちの願いのあまりのささやかさ、当たり前さに申し訳なく思うばかりです。

またジェンダー問題に関していうと、全国の中学校・高等学校では生徒会からジェンダー平等への取り組みが提案されたり、ルッキズム・性の商品化等に目が向けられたり、少しずつですが運動が始まっています。教師の側からも、ジェンダー平等学習カリキュラムが作られたり、生徒の役割分担や教材選択の見直しをしたり、様々な動きが生まれてきています。そう、大きな目で見れば、LGBTQ、ジェンダー、人種：さまざまな問題が少しずつ可視化さ

れてきてはいるのです。

ただ残念ながら多くの学校ではいまだに「さまざまな偏見や差別の再生産」がなされています。過激だと言われてもそれはその通りなので仕方ありません。管理職や同僚教師の、社会意識や慣習の中のジェンダーバイアスにどっぷり染まった言動に不快な思いをすることは日常茶飯事です。これは民間教育団体も同じです。マイクロアグレッション(無自覚の差別行為)アンコンシャスバイアス(無意識の偏見・思い込み)という広まり始めた言葉の通り、無自覚で無意識だから難しい。

上野千鶴子さんが「わたしはミソジニー(女性嫌悪)があまりにも深く埋め込まれた世界で生まれ育ったために、そうでない世界を想像できません。マルクスが階級の廃絶された世界について答えたのと同様に」と何かに書いていたのを思い出します。希望をいえさせめて子どもたちには新しい世界、わたしたちが生きたことのない世界を生きてほしいものです。あれ、これじゃ「故郷」のラストみたい。「私」と同じになっではいけませんね!

★遠藤まめた「性の多様性を前提とした学校づくりへ」(クレスコ(大月書店) 2023. 11号より引用)

## 山口大会を終えて

### 2023山口大会をふりかえって

山口文芸研山口東サークル・清田和幸

#### 〇コロナ禍を超えて

文芸研の皆さん、山口大会では大変、お世話になりました。前代未聞のコロナ禍が明け、ようやく開催できた山口大会でした。今回の山口大会をふりかえると、次から次へと、尽きない思い出が溢れてきます。

#### 〇くりかえした学習会

まずは、何度も何度もくり返した「学習会」です。それこそ、コロナ禍が始まった2020年。そもそも、この年に山口大会を開催する予定でしたので、この前の年から何度も学習会は開いていました。しかし、3月の一斉休校から全ての事態がひっくり返り、やむを得ず大会は中止。

2021年、2022年と全国大会をオンラインで開催する中、「きつと最初の対面での大会は山口だろう」と、圧倒的な不安を抱えていました。

そんな中、オンラインでの学習会や対面での学習会、さらにオンラインと対面を交えたハイブリッドの学習会を山口県内の各地で行っていききました。幸い、私自身、パソコンなどの機械を扱うのはそれほど抵抗がありませんでしたし、なんと言っても、我がサークルには2022年の文芸研オンライン大会の実行委員長を務めた酒井大輔さんもいます。酒井君と相談しつつ、他サークルや他の学習会のオンラインやハイブリッドの学習会に参加しながら、ハイブリッドの難しさやノウハウ、そして可能性を学んでいきました。

もちろん、私たちの学習にとつて最も大切なのは、オンラインやハイブリッドという形ではなく、学習する内容です。そこは拙い私たちを、山中吾郎さん、野澤正美さん、辻委員長等、さまざまな先輩方が理論や実践の面で支えてくださいました。

けれど、どうしても拭いきれない不安が私たちにはありました。それは参加者の数です。何度学習会を開いても、どれだけ多くの学校に案内を送っても、参加者が一向に増えないのです。多くても3〜5人。私たちサークル員を入れても、参加者が2ケタもいかないのです。「こんなことで、全国大会なんてできるの？」

## たびたび押し寄せる不安の波

他にも頭を悩ませたのは、記念講演の講師です。

さまざまな方を講師候補に挙げ、最終的に絵本作家の長谷川義史さんをお願いすることにしました。

そして、枚方サークルの松山さんを通じ、光村図書の方からお願いをしてもらいましたが、連絡すれどもなかなかお返事をもらえず……。そうこうしているうちに、3月も下旬になっていきました。もはやあきらめて別の方をお願いしようかと考えているところへ、ようやく、「講師を引き受ける」との連絡をいただき、みんなではっと胸をなでおろしました。ところが、一次ビラや当日のスケジュールなどについて連絡をすれども、やはりなかなかお返事をもらえず……。長谷川さんについてのヤキモキは、6月下旬ごろまで続きました。大会当日、舞台袖から長谷川さんをステージに送り出した瞬間、松山さんと心から喜び合いました。講演が大好評で本当に良かったです。

また、ハイブリッド開催ということで、全体会の会場のようすや登壇者の話がオンラインの方に無事伝わるか？とか、分科会のオンライン参加の方も、なるべく会場参加の方と同じように双方向で運営できるか？といった不安も、私や酒井君にずっと付きまといっていました。ハイブリッドについては酒井君

の尽力はもちろん、オンライン担当になってくださった方々やハイブリッド分科会を引き受けてくださったレポーターや司会者の方々に、微に入り細に入り運営していただき、参加者にも概ね満足していただけでした。ただ、長谷川さんの講演の際、せっかくのウクレレの演奏がよく聞こえなかったことや、分科会中の様々な不具合は、今後の検討課題として、徳島大会や来年以降の大会に引き継いでいきたいと思えます。

ハイブリッドの大会をやるにあたって、会場である山口県教育会館のホールでは、何度も実験を重ねました。また、会議室では学習会を兼ねたハイブリッドの実験を行い、実際にどんな機器が必要か、どんなセッティングならばオンライン参加者に声が届き、オンライン参加者の声を会場に届けるにはどうすればよいかなど、何度も実験を重ねる中で段々とわかっていきました。今後もハイブリッド方式の大会を続けていくとしたら、よりよい方法が考えられるかもしれません。

ハイブリッド方式の大会は大きな可能性を秘めていると、私自身は感じています。山口大会の参加者の約三分の一はオンライン参加者です。さまざまな事情から遠い現地には行けないが、西郷文芸学理論を学びたい、文芸の授業を知りたい……という方々が、

サークル空白地域も含めた日本全国に少なからずいらつしやるということが、今回よくわかりました。そういう方々にとつて、オンラインは「学習のための翼」と言えるかもしれません。一方、今回の対面開催であらためて、人と人のふれ合うよさ、温かさ也十分味わいました。オンラインという翼をもった私たちは、しかし、参加者と直接向き合い、語り合うという、大地に根差した活動をこれからも、続けていくべきだと思います。

Googleフォームを使った受付も、不安要素の一つでした。参加者に気軽に申し込んでもらうためには、どんな申し込み方法がよいのか、山口での学習会を続けながら考えていきました。Peatixによる受付・宣伝は慣れてしまえばかなり有効ですが、慣れていない方、特にオンラインに抵抗感のある方には、アカウントを作ることや、口座やカードに紐づけるといった手続きはかなり高いハードルなのだと、学習会をしながら感じていました。（都合では違うかもしれませんが、山口は田舎なので、尚更抵抗感を強く感じました。）

そこで、参加者が手軽に申し込めて、こちらもそれほど受付業務が大変ではないやり方を模索する中で、Googleフォームでの申し込みに行きつきました。これはそれほど抵抗感なく、参加者にやつ

てもらえたのではないかと思います。ただし「PayPal」は便利なのですが、手数料を数%取られてしまうので、PayPalでの入金が多くなると大会の会計への影響も大きくなります。そのことを考えておかねばならないでしょう。

### ○人を呼ぶために

そしてなんとといっても、参加者の数です。前述のとおり、何度学習会を重ねても参加者は一向に増えませんでした。4月の学習会の講師として、山口まで来てもらった辻委員長の顔が青ざめていたくらいです。

全国大会の参加者を増やすために、できることは何でもしようと、以下のことを行っていました。

- ・組合を通じた宣伝（定期大会、支部代表者会、定例委員会や、各支部を通じてのチラシの配付）
- ・くりかえした学校への案内（各学習会のお知らせ、大会の案内×3）
- ・市教研、国語部会など、管制研修での宣伝
- ・図書館回り（山口市内の図書館等の公共施設を回り、チラシやポスターをおかせてもらった）
- ・友人への宣伝（電話、メール、ハガキ、チラシの雨あられ）

・ツテを頼ってチラシ配布（校長、教頭、友人に頼み、その学校の職員にチラシを配ってもらった）

その他、はがきに大会のことを印刷し、知り合いや過去の学習会の参加者に郵送したりもしました。

とにかく不安を吹き飛ばせ！とばかりに、常に動き続き、発信し続け、大会の日を迎えました。

**山口大会開催！久しぶりに直接お会いする顔、顔、顔…**

山口大会を開催して本当に実感したことは、「やっぱり対面が良い」ということでした。全国の皆さんに山口に来てもらい、山口の地でお会いできた、そのこと自体が本当にうれしく思いました。大会自体は今まで諸先輩方が行ってきた大会とは比べようもないくらい小さな大会でしたが、無事開催できたこと、滞りなく大会を運営できたことが、何よりもうれしいことでした。ただ一つ残念なことは、交流会を開催できなかったことです。「もし、大会直前や大会中にコロナが蔓延したら？！」そうになったら、交流会は開催できなくなり、その際の返金や会場へのキャンセル料、その手続きなどを考えると本当に残念でしたが、今回の大会では交流会は行いませんでした。私個人としては、交流会はともやりましたかっただけですが、影の実行委員長である石田君にいて

ねいに諭され、泣く泣く諦めました。今後の大会の中で、交流会が復活することをひそかに期待する、昭和のじじいは私です。

そして、私たちの山口大会が、（わずかではあります）無事黒字で開催できたことは、本当に喜ばしいことです。全国の皆さんの奮闘なくしては実現できませんでした。特に、オンラインでもリアルでもたくさんの方が参加して下さった大阪の皆さん、また実質松田さんだけなのに、その十倍以上の方に参加いただいた徳島の方々。さらに、司会やオンラインの担当をして下さった方々、なんとい

つても、1年間クラス作りから教材研究、授業実践、さらにレポート作成（オンライン対応の分科会の方はオンライン用の資料まで作ってくださり、本当に頭の下がる思いです）までしてこられたレポーターの方々。

皆さん、本当にありがとうございました。





## ○山口に文芸研の灯を点す

山口の参加者は30数名と決して多くはない数ですが、中には何度呼び掛けても学習会に来てくれなかったのに大会には参加して下さった方々や、執拗なサークル員からの誘いにも気持ちよく応じて参加してくれた方、久しぶりの連絡にもかかわらず2つ返事で参加してくれた方、サークル員でもないのに現地実行委員として受付や分科会担当を引き受けてくださった方々、OBの方々、県内でも小さいつむじ風くらいは起こせたか？と思っています。

それにいろいろと備品を借りたり、コピーや印刷でお世話になったりした県教組の方々には、私たちの大会の成功を我がことのように喜んでいただきました。

山口に文芸研の灯を灯せた！と言えるかどうかは、これからの私たちのがんばり次第だと思っています。ですが、私たちには今回培った運動の経験そして、西郷先生から教えていただいた文芸理論や教育的認識論があります。今回の経験と西郷文芸学を胸に抱きつつ、これからも本州の端っこで、文芸研の灯を次世代に伝えていこうと決意しています。それが、今回お世話になった方々や西郷先生への恩返しだと思います。





## サークル便り（豊前サークルより）

### 文芸研の「つながり」に感謝

福岡文芸研豊前サークル 岡崎春美

#### 1. はじめに〜豊前サークルの今〜

サークル員が私一人になったことと、家庭の事情で遠方での学習会に参加するのが難しくなったことが重なり、今後は日帰りできる場所での全国大会に参加するだけになってしまふのかと思つたのがちょうど四年ほど前のことです。このまま「サークル」の看板を掲げておいてもよいものか、山中尊生さんに相談したことがあります。尊生さんには「0と1では全く違う。一緒にできることをやっていきましよう。」と言つていただき力強くありがたく思いました。

そして、ちょうどその頃から世の中がコロナ禍となり、「オンライン」という方法で学習会に参加することが可能となりました。私にとっては本当にありがたいことでした。今は、東京BMSを中心にオンラインでの学習会に参加させていただいています。全国のみなさん、いつもお世話になっています。ありがとうございます。

#### 2. 文芸研と校内研究

私は今年度の人事異動で、国語科の研究をしている学校へ転任しました。しかも、今年度市内の研究発表会の順番が回つてきている学校です。「あーあ、国語は好きにしたいんだけどな・・・。」と思いながらの赴任でした。

学校の研究テーマは「確かに読む力を育てる国語科学習指導」3つの「明確化」を意識した授業づくりを通してです。3つの明確化というのは、①指導事項と学習課題の明確化②対話の視点の明確化③ふり返りの視点の明確化です。①の指導事項と学習課題の明確化の中で、子どもたちに「つきたい力」を明確化する、関連図書の「平行読書」をすることあり「これは単元を貫く言語活動で言われていたことそのままでは？」とさらにがっかりしました。しかも、単元は説明文に限る、というのです。なぜ説明文に限るのかと質問すると、「物語は、子どもたちがあれこれ言つて收拾がなくななるから。」という旨の話をされました。それは、教材分析、教材解釈が甘いからでは・・・という言葉をぐっと飲み込み、校内の研究構想に乗っかっているように見せかけ、なるべく文芸研の授業に近いことをやろう、と心に決めました。

### 3. 「ありの行列」と「ウナギのなぞを追って」

豊前市では光村図書を採択しているので、二学期に行われる研究発表会では「世界にほこる和紙」の授業をするのが妥当だと考えました。しかし、学級に「生き物研究係」があり、昼休みに「深海生物教室」を企画運営するような子どもたちだからこそ、「ウナギのなぞを追って」のほうがおそらく読めるのではないかと考え、単元を入れ替えて発表会では「ウナギのなぞを追って」の授業をすることになりました。

「ウナギのなぞを追って」での「つけたい力」は指導書でも、研究構想でも「要約すること」となっています。しかし、「要約するために読む」ことは絶対にしたくないと思ったのです。研究者が真実に迫っていく姿と、筆者の説得の論法を子どもたちとおもしろく読んでいきたい。そんなふうに読んでいった結果、「おもしろかったからお話の内容を誰かに伝えたい」、「相手に伝えるために、要約しよう」となるようにしたいと考えました。

研究者が真実に迫っていく姿と説得の論法をおもしろく読んでいくには、と考えているときにふと「ありの行列」が浮かびました。ウイルソンが真実に迫っていく姿と、「ウナギのなぞを追って」の研究者

たちが真実に迫っていく姿を比べ読みしてはどうかと思っただけです。私は「研究者が真実に迫る姿」を類比して、「ありの行列」を使おうと思い立ったのですが、図らずも研究構想の「平行読書」にヒットしたようで、校内研究を指導する指導主事からは「なるほど、そうきたか！」と大変褒めていただきました・・・。

### 4. 研究発表会

研究発表会の授業では、まず「ありの行列」のウイルソンが仮説（実験）と検証をくり返ししながら真実に迫っていく姿をふり返りました。そして、「ウナギのなぞを追って」の研究者はどうか、文末表現に気をつけながら読んでいきました。五段落から十一段落という長いところを読みましたが、子どもたちは文末が言い切りの形になっているところ（事実）と、「思われます」や「考えられます」のような形になっているところ（仮説）をすぐに見つけていました。八段落の「ウナギは、新月のころに合わせて、いつせいにたまごを生んでいるようなのです。」というところでは、「強調表現が使われているから、事実を言っているのではないか。」「いや、ようなのとあるから、決めつけてないから仮説だと思う。」というようなグループレッスン話し合いが行われていました。

指導案審議のときに、「研究者が真実に迫る姿を讀んでいきたい。」と言うと、指導主事は「それは理科の学習みたいだ。」と言いました。でも私が文末表現に目を付けさせると言うと、指導主事は「それこそが国語だ。」と答えました。ワークシートに文末表現だけを括弧抜きにしたものを用意すると、「気に入った!」と言っていました。指導主事の目をおかしながら本時を終え、その後の授業では説得の論法について考えたり、要約する場合でも最初に「ありの行列」を要約やってみてから、「ウナギのなぞを追って」の要約をしたりしていきました。

これまで何度も四年生を担当していますが、「ありの行列」と比べ読みをするのは、子どもたちが「ウナギのなぞを追って」を読むにあたってとてもよい方法だなと感じました。

## 5. おわりに

今回の授業をするにあたり、かつて「ウナギのなぞを追って」で全国大会のレポートを書かれた山中尊生さんにも授業を考えるヒントとなることを教えていただきました。また、今年の山口大会で説明文の分科会を担当された松山さんにも大変お世話になりました。分科会で松山さんがおっしゃっていた「抜き刷り」を「ありの行列」で使おうと考えたのです。

松山さんを通じて、大阪の光村図書の担当の方から、豊前の担当の方へつなげていただき、その方（その方も岡崎さん!）にお願ひして、「ありの行列」の抜き刷りを授業で使うことができました。

文芸研での「つながり」のおかげで、気が重かった今回の研究発表会を楽しく乗り越えることができたとは本当にありがたく思っています。（そのつながりでも、この文芸研ニュースを書くに至った、というのもありました。）今後とも、豊前の地で文芸研の灯をともし続け、その灯を少しでも大きくできるように自分にできることをやっていきたいと思っています。

全国の皆さん、今後ともよろしくお願ひします。最後に、「ウナギのなぞを追って」での子どもたちの学習の感想を紹介します。

### 「研究者」

まず仮説を立てて事実を見つけ、それをくり返して事実をつきとめていくのは、研究者たちみんな同じだと思いました。勉強している中で、他の研究者も仮説を立てて事実を見つけ、それをくり返して事実をつきとめていくのが分かったからです。

### 「筆者の工夫」

私は今日の授業で、実は筆者がこの文章の中でた

くさんの書き方の工夫をしていたと分かりました。これからは、筆者の書き方の工夫をまねして、次に文章を書くときにいかそうと思います。



## 青年学校便り

### 青年学校学習会（オンライン）開催

8月19日（土）に、青年学校第4回学習会がオンラインで開催されました。

午前の部は、千葉文芸研の曾根成子先生より、文芸研の授業についてお話をいただきました。前半は、詩『春のうた』『かぼちやのつるが』『ゆうひのてがみ』の授業についてみんなで考えました。後半は、物語『白いぼうし』を通して、文芸研の「ものの見方・考え方」を生かした授業について教えていただきました。

午後の部は、広島文芸研の吉田剛人先生より、認識の方法（特に、構造・関係・機能を中心に）について、教えていただきました。国語の授業だけでなく、

他の教科でも実践されている認識の方法を分かりやすくお話いただきました。

オンライン開催ではありましたが、教材研究、授業づくりについて、それぞれが自身を見直し、学びの多い充実した時間となりました。先生方、本当にありがとうございました。

午前の部 詩「春のうた」「かぼちやのつるが」

「ゆうひのてがみ」「白いぼうし」の教材分析

視点人物の設定、表現の特色、認識の方法について、青年学校生でグループ討議を通して考え、曾根先生からご指導・ご助言をいただきました。

《参加者の感想より 抜粋》

・4つの教材を使って視点や表現の特質などの観点で教材分析を行いました。特に、視点の分析では、とらえ方が自分とは異なることに気づき、勉強になりました。

・「自分の力で、分析する」を通した活動を体験させていただきました。ご指導いただいた分析方法は、自分の教材研究、授業どちらにも共通して活用できる芯になりえるものだと思います。

・認識の方法と発達段階はつながりがあるというお話で、認識の方法がとらえやすくなりました。

#### 「春のうた」

・冬眠の体験をさせるといふ手立て、実践したいと思いました。「秋の夜の会話」「えぼ」と一緒に読むことで、よりいっそう詩の世界に浸ることができそうです。

・草野心平さんの詩に蛙がよく登場するのはなぜ？と疑問を抱いたことはなかったので、作者の生い立ちや思いを知ること、詩を深く味わえると思いました。

・前文の価値づけ、句読点にいたるまで、すべてに意味があることに気づかされました。なぜこの表現なんだろう、と教材を読み込むほどにイメージがふくらみ、人間の真実に迫っていくことを実感しました。

#### 「ゆうひのてがみ」

・温かい言葉と色彩がとても素敵な詩でした。「ひ」という言葉のもつ二重のイメージや「ゆうひ」を「ちぎる」という独特なのに生き生きと伝わる比喻など、表現のもつ特性を巧みに利用した詩だと思いました。

・一つ一つの表記や表現がどれもかけてはならず、それぞれが響き合い、詩のあたたかなイメージを膨らませていることに、言葉の奥深さと深い世界観に文芸理論で学ぶ楽しさを感じました。

#### 4年「白いぼうし」

・どんな松井さんかを考える中で、内の目と外の目がうつりかわっていく部分があるということを教えていただき、視点人物についての理解が深まりました。

・ファンタジー作品の扱いには悩んでいました。ファンタジーに表れている人間の真実に到達する読みを目指していきたいと思います。

#### 午後の部 認識の方法(主に《構造》《関係》《機能》について)

・「ものの見方・考え方」を他教科だけでなく、教材分析から子どもの発言、教師の発問まですべてに関連付け、位置づけていくことに、狭い枠からダイナミックにかつ包括的にとらえなおす過程がとても楽しかったです。

・言葉で説明したり表現したりする力をこどもたちに身につけさせるには、国語に限らず全ての教科でものの見方・考え方を指導していくことが大切だとわかりました。わからないといえる雰囲気づくりや、困っている友だちを助けることなども学びました。

・認識の方法を国語科でしか意識していなかったことに気づきました。他教科からのお話を聞くことで、

なぜものの見方・考え方を学ぶことが大切なのかを、自分の中で整理することができました。

全国大会が終わってすぐの開催でした。お忙しい中、資料をご準備いただきご指導いただいた先生方、本当にありがとうございます。2学期の授業も、実りあるものになるよう努力していきます。

## 事務局通信

寒波が到来し、寒さの厳しい冬になりましたが、いかがお過ごしでしょうか。来年の徳島大会に向けて、徳島の松田真理大会委員長の元、関西・四国ブロックの皆様を中心として、全国の皆様のお力をお借りして、良いものにしていきたいと思えます。「指導書がなかったら、授業の仕方がわからない。」「教材研究って面白いんですね。」と本当に国語の授業に困っている先生もたくさんいます。西郷理論があるからこそ、文芸研の授業で子どもたちが変わっていきます。今こそ、文芸研での学びを深め、全国にさらに広げていくことができる時期にきています。冬の実践研で皆様にお会いできることを楽しみにしています。来年の夏に向けて、熱い検討と準備を重ねていけたらと思います。どうぞよろしく願います。

★文芸教育、授業シリーズについての呼びかけ・販売をお願いします。まずは、サークルでの読み合わせ、学習会を組織し、文芸教育の良さをたくさんの方に伝えていきましょう。各サークルで、知恵を出し合い、よい方法があれば、全国に共有をお願いします。12月編集委員会も行われました。今の教育に必要なテーマ。困っている人に届くような内容を議論し、構成しています。是非、一人でも多くの方の手に渡るように各サークルでのご協力よろしくお願いします。

★サークル会費納入お願い。まだお済みでないサークルは振り込みでの納入をお願いします。ご協力よろしくお願いします。

## 今後の予定

今後の予定（予定がくわしく決まりましたら随時連絡します。）

5月 春の実践研予定（神戸）

8月3日（土）4日（日）文芸研徳島大会

※新しい年間計画が出来ましたら、年間計画をもとに様々なご準備をお願いします。



## 【事務局員の妄想日記】ある日の学級通信より

昨日は朝から、「アレ」「アレ」というフレーズが教室で聞こえました。

担任が阪神ファンだと知っているのも、アレの話をして来てくれる子もいました。そろそろアレではなく、ゴールテープは目の前なので、一位のチームだけが輝くあのフレーズを使っても良さそうです。

しかし、もしそのフレーズを使い、調子に乗ってしまったことで油断が生まれ、アレが遠のいたらいいやなので、まだアレのことはアレと言っておきました。

さあ、昨日はシンプルに阪神が勝つか、広島が負けるかで、阪神のゆう：アレが決まる日でした。仕事中、放課後の会議中には、阪神のこともアレのことも思う暇もないわけですが、学校を出る時間になるとアレ一色。

問題は、テレビの野球中継がサンテレビしかないことでした。自分の暮らす京都では、サンテレビが映りません。ラジオで何とかしないといけませんでした。

もう一つの問題は、どうやってゆうし：アレが決まるか問題です。一番いやなのは、阪神が負け、二位の広島が勝つてのアレ決定。次が、阪神が勝つてのアレ

決定の前に、広島対中日戦が終わり、広島が負けることです。その時点で阪神が勝とうが負けようが、アレが決まってしまうのです。やはり自分達が勝って、その結果としてアレが決定してほしいです。最後のアウトは三振か、ゴロかフライか、グローブにボールがバシッと収まって、ゲームセット。そこで初めてアレが決まる。それを望みます。

Nさんは広島ファンですが、担任の阪神トークにも付き合ってくれています。今シーズンは、許してください。広島が数年前に三連覇した時、阪神はいつもその下にいて、悔しい思いをしました。十八年振りのゆうしよ：アレなので、許してください。

まだクライマックスシリーズやおそらくオリックスとの日本シリーズが待っています。大事な試合が続きます。浮かれてはいけません。自分は、ひとまずまだアレと言っておきます。岡田監督は、アレは今日で終わりでと言っていました。日本一はアレではなく、別のいい言葉があれば教えてほしいとも。「ソレ」では、簡単そうに感じるかな。近い感じが過ぎます。個人的には「アソコ」かな。アレを指して達成した次につかみにいくのは、アソコ。岡田監督に「アソコ」を採用してほしいです。